国際研究論叢　29（2）：33～46，2016

狂言ならびにキリシタン資料の形容詞についての一考察

村　田　菜穂子＊1　　前　川　　武＊2

A Study of the Adjectives Used in Kyogen and Christian Materials

Nahoko Murata＊1　　Takeshi Maekawa＊2

Abstract

We analyzed and considered the adjectives used in ancient works, an anthology of eight poems, prose works from the Heian period and documents written in Chinese with characters rendered into Japanese, the *Konjaku Monogatari* (Tales of Times Now Past), and the *Gunki Monogatari*.

From this research it became obvious that there is a big difference between the adjectives in ancient times and those after the Middle Ages.

This article discusses the adjectives used in Kyogen and Christian Materials from the point of view of type of inflection, the number of composition units, and layered structure in comparison with other ancient and medieval works.

キーワード

形容詞、狂言、キリシタン資料、語彙表、語彙史

はじめに

これまで、形容詞・形容動詞語彙について、A上代資料および中古資料（B散文作品・C八代集・D訓点資料）におけるさまざまな調査を行い、語構成をはじめとする質的性格ならびに構成比率などの量的性格についての分析および考察結果を拙著『形容詞・形容動詞の語彙論的研究(注1)』において述べた。そして、これに続き、E今昔物語集、F軍記物語三作品についても同様の調査、および分析・考察を行った(注2)。

その結果、上代形容詞と中古以降の資料の形容詞との間には明らかな違いが存していた。

＊1　むらた　なほこ：大阪国際大学国際教養学部教授〈2015.9.25受理〉
＊2　まえかわ　たけし：大阪国際大学短期大学部教授

一つは、上代形容詞において見られたク活用形容詞とシク活用形容詞との間の均衡が崩れるという変化、すなわち、(前掲の）中古以降の資料（Ｂ～Ｆ）から採取された形容詞の構成比率は、いずれの作品でもク活用形容詞がシク活用形容詞を大きく上回り、ク活用とシク活用形容詞の間に見られた均衡が崩れている。

さらに、一語あたりの語構成要素の数である構成単位数でも、Ａ上代形容詞ではク活用形容詞・シク活用形容詞ともに二単位語が優勢であったのが、中古以降の資料（Ｂ～Ｆ）から採取された形容詞においては、ク活用形容詞は三単位語が、シク活用形容詞は二単位語が優勢と活用形式によって差違が生じているという変化が見られた。

これらのほか、派生や複合による副次結合の度合いを分析した階層構造（副次結合度）や、語の組み立てを分析した造語形式という点でもＡ上代形容詞と中古以降の資料（Ｂ～Ｆ）の形容詞とでは明らかな差違が認められたのである。もっとも、この差違とは、異なり語数から見た場合、すなわち、見出し語の種類を分析して「体系」の変化を考察した結果であり、延べ語数から見た場合、すなわち、それぞれの形容詞がどのように用いられているかを分析して「運用のあり方」を考察した結果とはやや様相が異なっている。

さらに、Ｆ軍記物語より後の形容詞の使用状況を見るべく、Ｇ狂言ならびにＨキリシタン資料で使用されている形容詞を採取してその使用頻度を前稿①「狂言の形容詞(注3)」、前稿②「キリシタン資料の形容詞(注4)」に公表し、加えて、語構成等の分析結果を前稿③「狂言・キリシタン資料の形容詞の語構成(注5)」で行った。しかしながら、これら前稿①②③に基づく質的性格ならびに量的性格に関する考察をいまだ行っていないので、本稿では、狂言ならびにキリシタン資料の形容詞に焦点を当て、質的側面と量的側面における異なり語数から見えてくる「体系」を中心に分析・考察することにしたい。

なお、今回取り上げる狂言ならびにキリシタン資料とは、すでに前稿①②③に示しているとおり、Ｇ狂言資料＝『天正本狂言』『虎明本狂言』『虎清本狂言』『狂言六義』『狂言記』の五作品、Ｈキリシタン資料＝『天草版平家物語』『天草版伊曽保物語』『天草版金句集』『懺悔録』の四作品である（以下、下線部を用いて作品名を示す)。

一

最初に、狂言ならびにキリシタン資料より前の資料には見られず、Ｇ狂言資料ないしはＨキリシタン資料で初めて採取された形容詞を見ておく。

Ｇ狂言資料およびＨキリシタン資料にて採取された形容詞全体の語構成は、前稿③「狂言･キリシタン資料の形容詞の語構成(注5)」に掲載したとおりであるが、全体517語のうち、Ｇ狂言資料ないしはＨキリシタン資料で初めて採取された形容詞は195語であり、それらを抜き出したものを表１に示す。

表１の「出現」列は各見出し語がＧ狂言資料にのみ出現するのか（その場合Ｇと表記)、Ｈキリシタン資料にのみ出現するのか（その場合Ｈと表記)、両資料に出現するのか（その場合ＧＨと表記)を表しており、Ｇ狂言資料にのみ出現するものは148語、Ｈキリシタン資料にのみ出現するものは38語、両資料に出現するものは９語であった。

表１　狂言・キリシタン資料の新出形容詞

NO.	見出し語	漢字	活用	階層構造	造語形式	単位数	結合タイプ	出現
1	あだなし	徒	ク	第一次	形容動詞(語幹)＋ナシ	2	(ゴ＋セ)	G
2	あたりちかし	辺近	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
3	あどなし		ク	第二次	語基＋無シ	3	[ゴ＋(ゴ＋セ)]	G
4	あはれみなし	哀無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
5	あらためにくし	改	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
6	ありきにくし	歩難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
7	いそくさし	磯臭	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
8	いたしにくし	致難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
9	いでなし	出無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
10	いひごとなし	言事無	ク	第二次	名詞＋形容詞	4	[(タ＋タ)＋(ゴ＋セ)]	G
11	いらいらし	苛苛	シク	第一次	名詞の重複＋シ	3	[(タ＋タ)＋セ]	G
12	いろいろし	色色	シク	第一次	名詞の重複＋シ	3	[(タ＋タ)＋セ]	G
13	うそあまし	甘	ク	第二次	ウソ＋形容詞	3	[セ＋(ゴ＋セ)]	H
14	うちたてにくし	打立難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	4	[(セ＋タ)＋(ゴ＋セ)]	G
15	うっそらにくし	打空難	ク	第三次	ウツ＋形容詞	4	{セ＋[セ＋(ゴ＋セ)]}	G
16	うつつなし	現無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
17	うつつらにくし	打憎	ク	第三次	ウツ＋形容詞	4	{セ＋[タ＋(ゴ＋セ)]}	G
18	うれしがなし	嬉悲	シク	第二次	形容詞(語幹)＋形容詞	3	[ゴ＋(ゴ＋セ)]	G
19	えかしこし	得賢	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
20	えきなし	益無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
21	おくりにくし	送憎	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
22	おそれがまし	恐・畏	シク	第一次	動詞(連用形)＋ガマシ	2	(タ＋セ)	G
23	おそれふかし	恐深	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
24	おちがたし	落難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
25	おひがたし	追難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
26	おぼえにくし	覚難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
27	おほきし	大	ク	第一次	形容動詞(語幹)＋シ	2	(ゴ＋セ)	G H
28	おもしろをかし	面白	シク	第二次	形容詞(語幹)＋形容詞	3	[ゴ＋(ゴ＋セ)]	G
29	かかりやすし	懸易	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
30	かくしがひなし	隠甲斐無	ク	第三次	形容詞(語幹)＋形容詞	4	{タ＋[タ＋(ゴ＋セ)]}	G
31	かけりがたし	翔難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
32	かしらかたし	頭固	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
33	かずわろし	数悪	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
34	かたむけがたし	傾難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
35	がってんなし	合点無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
36	かなくさし	金臭	ク	第二次	名詞被覆形＋形容詞	3	[セ＋(ゴ＋セ)]	G
37	かひだるし	腕弛	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
38	かへりなし	帰無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
39	かみくさし	神臭	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
40	ききなし	聞無	ク	第二次	動詞(連用形)＋無シ	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
41	きつし		ク	第一次	語基＋シ	2	(ゴ＋セ)	G H
42	きはどし	際疾	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
43	きょくなし	曲無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G H
44	くどし		ク	第一次	語基＋シ	2	(ゴ＋セ)	G
45	くらはじなし	食	ク	第一次	(動詞被覆形＋助動詞)＋ナシ	3	[(ゴ＋セ)＋セ]	G
46	げげくさし	下々臭	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
47	けなりし	異	ク	第二次	形容動詞(終止形)＋シ	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
48	こがるし	小軽	ク	第二次	コ＋形容詞	3	[セ＋(ゴ＋セ)]	H

NO.	見出し語	漢字	活用	階層構造	造語形式	単位数	結合タイプ	出現
49	こころうれし	心嬉	シク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	H
50	こころおもしろし	心面白	ク	第三次	名詞＋形容詞	4	｛タ＋［タ＋（ゴ＋セ）］｝	G
51	こざかし	小賢	シク	第二次	コ＋形容詞	3	［セ＋（ゴ＋セ）］	G
52	ござりにくし	御座難	ク	第二次	動詞（連用形）＋形容詞	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
53	こすし	狡	ク	第一次	語基＋シ	2	（ゴ＋セ）	G
54	ことおほし	事多	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
55	ことくどし	事詳	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
56	ことくはし	事委	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
57	ことむつかし	事難	シク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
58	こむつかし	小難	シク	第二次	コ＋形容詞	4	｛セ＋［（ゴ＋セ）＋セ］｝	G
59	さかくさし	酒臭	ク	第二次	名詞被覆形＋形容詞	3	［セ＋（ゴ＋セ）］	G
60	さかざかし	賢々	シク	第一次	形容詞（語幹）の重複＋シ	3	［（ゴ＋ゴ）＋セ］	H
61	さくし		ク	第一次	語基＋シ	2	（ゴ＋セ）	G
62	さしよし	指良	ク	第二次	動詞（連用形）＋無シ	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
63	さたなし	沙汰無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
64	さへがたし	障難	ク	第二次	動詞（連用形）＋形容詞	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	H
65	さもし	様悪	シク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
66	さもなし		ク	第二次	副詞＋無シ	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
67	ざれことぶかし	戯言深	ク	第二次	名詞＋形容詞	4	［（ゴ＋タ）＋（ゴ＋セ）］	G
68	さんじやすし	散易	ク	第二次	動詞（連用形）＋形容詞	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
69	しげなし		ク	第一次	語基＋ナシ	2	（ゴ＋セ）	G
70	しさいなし	子細無	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
71	しつけらし	仕付	シク	第一次	名詞＋ラシ	2	（タ＋セ）	G
72	じひふかし	慈悲深	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
73	しふしんふかし	執心深	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
74	しほなし		ク	第二次	語基＋無シ	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
75	しほらし	萎	ク	第一次	動詞被覆形＋シ	2	（ゴ＋セ）	G
76	じゃうごはし	情強	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
77	しゃうだいなし	正体無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
78	しゃうらかし	姓名	ク	第一次	名詞＋ラカシイ	2	（タ＋セ）	G
79	じゅくしくさし	熟柿臭	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
80	しりなし	知無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
81	しわし	吝	ク	第一次	語基＋シ	2	（ゴ＋セ）	G
82	しんかうなし	信仰無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
83	すぢなし	筋無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G H
84	ずなし	図無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
85	すねし	拗	ク	第一次	語基＋シ	2	（ゴ＋セ）	G
86	せはし	忙	シク	第一次	語基＋シ	2	（ゴ＋セ）	G
87	せはしなし	忙	ク	第一次	語基の重複＋シ	3	［（ゴ＋ゴ）＋セ］	G
88	せはせはし	忙忙	シク	第一次	語基の重複＋シ	3	［（ゴ＋ゴ）＋セ］	G
89	そばちかし	傍近	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	H
90	ぞんじなし	存知無	ク	第二次	動詞（連用形）＋無シ	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G H
91	だいじなし		ク	第二次	名詞＋無シ	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
92	たづねなし	尋無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
93	たらしよし	誑良	ク	第二次	動詞（連用形）＋形容詞	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
94	だるし	弛	ク	第一次	語基＋シ	2	（ゴ＋セ）	G
95	たをやし	嫋	ク	第一次	形容動詞（語幹）＋シ	3	［（ゴ＋セ）＋セ］	G
96	だんなし	大事無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G
97	つかまつりよし		ク	第二次	動詞（連用形）＋形容詞	3	［タ＋（ゴ＋セ）］	G

NO.	見出し語	漢字	活用	階層構造	造語形式	単位数	結合タイプ	出現
98	つきなし	付無	ク	第二次	動詞(連用形)＋無シ	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
99	つぼし	窄・壺	ク	第一次	名詞＋シ	2	(タ＋セ)	G H
100	つらにくし	面憎	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
101	てづよし	手強	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	H
102	てむさし	手	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
103	とうかんなし	等閑無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
104	とざまがまし	外様	シク	第二次	名詞＋ガマシ	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
105	としひさし	年久	シク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	H
106	ととのえがたし	調難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	H
107	とびにくし	飛難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
108	とほとほし	遠遠	シク	第一次	形容詞(語幹)の重複＋シ	3	［(ゴ＋ゴ)＋セ］	G
109	とりにくし		ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
110	とりよし		ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
111	なしにくし		ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
112	なふじゅうなし	納受無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
113	なぶりよし	嬲良	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
114	なまぬるし	温	ク	第二次	ナマ＋形容詞	3	［セ＋(ゴ＋セ)］	G H
115	なりにくし	成難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
116	なりよし	成良	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
117	なんでもなし	何無	ク	第二次	副詞＋無シ	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
118	なんともなし		ク	第二次	副詞＋無シ	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
119	にあはし	似合	シク	第一次	動詞被覆形＋シ	2	(ゴ＋セ)	G
120	にくにくし	憎憎	ク	第一次	形容詞(語幹)の重複＋シ	3	［(ゴ＋ゴ)＋セ］	G
121	にんげんちかし		ク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
122	ねだりがまし		シク	第一次	動詞(連用形)＋ガマシ	2	(タ＋セ)	G
123	ねだりくさし		ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
124	ねにくし	寝難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
125	ねばし	粘	ク	第一次	動詞被覆形＋シ	2	(ゴ＋セ)	G
126	ねむし	眠	ク	第一次	動詞被覆形＋シ	2	(ゴ＋セ)	G
127	ねりなし	練無	ク	第二次	動詞(連用形)＋無シ	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
128	のうなし	能無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
129	のこりずくなし	残少	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	H
130	のぞまし	望	シク	第一次	動詞被覆形＋シ	2	(ゴ＋セ)	H
131	のぼりなし	上無	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
132	はしかし	芒	ク	第一次	名詞＋シ	2	(タ＋セ)	G
133	はなれやすし	離易	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
134	はひりにくし	入難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
135	ひきあげがたし	引上難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	H
136	ひだるし	饑	ク	第二次	ヒ＋形容詞	3	［セ＋(ゴ＋セ)］	G H
137	ひとおそろし	人恐	シク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
138	ひとおほし	人多	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
139	ひとがまし	人	シク	第一次	名詞＋ガマシ	2	(タ＋セ)	G
140	ひとくさし	人臭	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
141	ひとこはし	人強	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
142	ひとちかし	人近	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
143	ひとどほし	人遠	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	G
144	ひるいなし	比類無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	［タ＋(ゴ＋セ)］	H
145	ふかし	深	シク	第一次	動詞被覆形＋シ	2	(ゴ＋セ)	G H
146	ふがひなし	腑甲斐無	ク	不明				G

NO.	見出し語	漢字	活用	階層構造	造語形式	単位数	結合タイプ	出現
147	ふせぎがたし	防難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
148	ふちたかし	縁高	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
149	ふんべつらし	分別	シク	第一次	名詞＋ラシ	2	(タ＋セ)	G
150	へんなし	篇無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
151	ほうじつくしがたし	報尽難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	4	[(タ＋タ)＋(ゴ＋セ)]	H
152	ほぞたへがたし	臍堪難	ク	第三次	名詞＋形容詞	4	{タ＋[タ＋(ゴ＋セ)]}	G
153	ほとけくさし	仏臭	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
154	ほどひさし	程久	シク	第二次	名詞＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
155	ほろびやすし		ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
156	まうけがたし	設難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
157	まうけやすし	設易	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
158	まことらし	実	シク	第一次	名詞＋ラシ	2	(タ＋セ)	G
159	まつやにくさし	松脂臭	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
160	まはしやすし	廻易	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
161	まるし	丸	ク	第一次	語基＋シ	2	(ゴ＋セ)	G
162	みえなし	見無	ク	第二次	動詞(連用形)＋無シ	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
163	みしりにくし	見知難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
164	みしりやすし	見知易	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
165	みたくなし	見無	ク	第二次	動詞(連用形)＋助動詞＋無シ	4	[(タ＋セ)＋(ゴ＋セ)]	G
166	みづくさし	水	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
167	みづらし	見辛	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
168	みやすし	見易	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
169	むげなし	無下	ク	第一次	形容動詞(語幹)＋ナシ	2	(ゴ＋セ)	G
170	むごし	惨・酷	ク	第一次	語基＋シ	2	(ゴ＋セ)	G
171	むさし		ク	第一次	語基＋シ	2	(ゴ＋セ)	G
172	むまくさし	旨	ク	第二次	形容詞(語幹)＋形容詞	3	[ゴ＋(ゴ＋セ)]	G
173	めぢかし	目近	ク	第二次	名詞＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
174	もくさもなし	目算無	ク	第二次	名詞＋無シ	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
175	もちよし	持良	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
176	もったいなし	勿体	ク	第二次	名詞＋無シ	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
177	もとめがたし	求難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
178	ものがまし		シク	第一次	名詞＋ガマシ	2	(タ＋セ)	H
179	ものすごし	物凄	ク	第二次	モノ＋形容詞	3	[セ＋(ゴ＋セ)]	G
180	ものせはしなし	物忙	ク	第三次	モノ＋形容詞	5	{タ＋[(ゴ＋セ)＋(ゴ＋セ)]}	G
181	ものほし	物欲	ク	第二次	モノ＋形容詞	3	[セ＋(ゴ＋セ)]	G
182	ものみだけし	物見猛	ク	第二次	名詞＋形容詞	4	[(セ＋タ)＋(ゴ＋セ)]	G
183	もれやすし	泄易	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
184	やうがまし	様	シク	第一次	名詞＋ガマシ	2	(タ＋セ)	G
185	やぶれやすし	敗易	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
186	やるせなし	遣瀬無	ク	第二次	名詞＋無シ	4	[(タ＋タ)＋(ゴ＋セ)]	G
187	ゆきがたし	行難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
188	ゆきにくし	行難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
189	よびよし	呼良	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
190	わきまえにくし	辨難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
191	わきまへがたし	弁難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
192	わけがたし	分難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G
193	わわし	騒	シク	第一次	語基の重複＋シ	3	[(ゴ＋ゴ)＋セ]	G
194	をさまりやすし		ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	H
195	をりがたし	居難	ク	第二次	動詞(連用形)＋形容詞	3	[タ＋(ゴ＋セ)]	G

二

次に、異なり語数から見た狂言ならびにキリシタン資料から採取された形容詞の活用別の構成比率を見ておこう。

表２－１は狂言資料、表２－２はキリシタン資料から採取された形容詞の異なり語数から見た活用別構成比率を示したものである。表２－１および表２－２を見ると、狂言資料全体の活用別構成比率はク活用形容詞が73.9%・シク活用形容詞は26.1% であるのに対して、キリシタン資料全体のそれはク活用形容詞が68.4%、シク活用形容詞は31.4% と、ク活用対シク活用の構成比はおおよそ７対３でいずれの資料もク活用形容詞が大幅にシク活用形容詞を上回っている。

表２－１　狂言

分　類	狂言		作品名	天正本	虎明本	虎清本	狂言六義	狂言記
	異なり語数	比率(%)						
ク活用	295	73.9	語数	53	224	31	163	294
			比率(%)	72.6	72.3	60.8	71.5	74.1
シク活用	104	26.1	語数	20	86	20	65	103
			比率(%)	27.4	27.7	39.2	28.5	25.9
合　計	399	100.0	語数	73	310	51	228	397

表２－２　キリシタン資料

分　類	キリシタン		作品名	平家	伊曾保	金句	懺悔
	異なり語数	比率(%)					
ク活用	203	68.4	語数	140	76	66	23
			比率(%)	64.2	71.7	70.2	65.7
シク活用	94	31.6	語数	78	30	28	12
			比率(%)	35.8	28.3	29.8	34.3
合　計	297	100.0	語数	218	106	94	35

これら両資料から採取された形容詞とこれまでに公表したＡ上代形容詞ならびに中古資料（Ｂ～Ｆ）の形容詞の活用別の異なり語数とその構成比率と見比べるためにもう一度示すと以下のようであった。

		ク活用 ― シク活用
Ａ	上代形容詞	134語 ― 114語（54.0％対46.0％）
Ｂ	散文作品の形容詞	738語 ― 368語（65.7％対34.3％）
Ｃ	八代集の形容詞	210語 ―　61語（77.5％対22.5％）
Ｄ	訓点資料の形容詞	152語 ―　44語（77.6％対22.4％）
Ｅ	今昔物語集の形容詞	347語 ― 115語（75.1％対24.9％）
Ｆ	軍記物語の形容詞	213語 ―　95語（69.2％対30.8％）

「**はじめに**」でも述べたように、中古以降の資料における活用別構成比率は上代形容詞に見られた均衡を破り、若干誤差はあるもののク活用対シク活用の構成比はおおよそ７対３で、Ｇ狂言資料およびＨキリシタン資料の形容詞もこれらと同じ状況を受け継いでいる。

次に、各資料の個々の作品に目を移してみると、キリシタン資料の四作品は作品間の差はあまりないのに対して、狂言資料の場合、虎清本狂言の活用別構成比率がク活用形容詞60.8%、シク活用形容詞39.2% と、他の作品に比べてク活用形容詞とシク活用形容詞の比率差はやや小さくなっている。ただし、どのような理由で虎清本狂言だけにこのような様相が見られるのかについては現時点では判断が下せないが、おさえておくべきであろう。

三

続いて、構成単位数という観点から異なり語数とその比率を見ておこう。

まず、Ａ上代形容詞ならびに中古資料（Ｂ～Ｆ）の形容詞から見た構成単位別の異なり語数とその構成比率は以下のとおりである。

※ク活用形容詞

	二単位	三単位	四単位以上
Ａ　上代形容詞	74語	57語	3語（55.2% — 42.5% — 2.2%）
Ｂ　散文作品の形容詞	90語	466語	183語（12.2% — 63.1% — 24.7%）
Ｃ　八代集の形容詞	59語	126語	25語（28.1% — 60.0% — 11.9%）
Ｄ　訓点資料の形容詞	55語	89語	0語（38.2% — 61.8% — 0%）
Ｅ　今昔物語集の形容詞	73語	194語	80語（21.0% — 55.9% — 20.5%）
Ｆ　軍記物語の形容詞	68語	126語	19語（38.2% — 61.8% — 0%）

※ シク活用形容詞

	二単位	三単位	四単位以上
Ａ　上代形容詞	70語	44語	0語（61.4% — 38.6% — 0%）
Ｂ　散文作品の形容詞	154語	204語	28語（39.9% — 52.8% — 7.3%）
Ｃ　八代集の形容詞	46語	13語	2語（75.4% — 21.3% — 3.3%）
Ｄ　訓点資料の形容詞	39語	5語	0語（88.6% — 11.4% — 0%）
Ｅ　今昔物語集の形容詞	69語	44語	2語（60.0% — 38.3% — 1.7%）
Ｆ　軍記物語の形容詞	66語	28語	1語（69.5% — 29.5% — 1.1%）

これを見てわかるように、Ａ上代形容詞ではク活用形容詞・シク活用形容詞ともに、二単位語が主流であったが、中古資料（Ｂ～Ｆ）の形容詞では、ク活用形容詞はいずれの資料でも三単位語がおよそ六割を占めるようになり長単位語化の様相がうかがえるようになる。一方、シク活用形容詞は、資料によって様相が異なり、Ｃ八代集・Ｄ訓点資料・Ｅ今昔物語集・Ｆ軍記物語のシク活用形容詞は二単位語が中心であり、しかもＥ今昔物語集を

除いて上代形容詞よりもさらに二単位語の割合が高くなっているのに対して、Ｂ散文作品のシク活用形容詞はク活用形容詞と同様に三単位語が優勢で長単位語化の様相が認められる。つまり、巨視的に見ると、ク活用形容詞における構成単位数は長単位語化の方向に進んでいる一方、シク活用形容詞は専ら二単位語を使用するという方向性が認められるということである。なかでも、Ｃ八代集とＤ訓点資料のシク活用形容詞においては上代形容詞よりも二単位語の割合がかなり高くなっていることは注意すべきであるが、そもそもＣＤ両資料にはシク活用形容詞が極端に少ないということをまず問題にすべきであり、ここに両資料の特異とも言える性格が潜んでいる。

Ｃ八代集、すなわち、和歌では「晴の歌という性格」というものに縛られ､「作者の個人的感懐の理解を読み手に強制することを避ける(注６)」ということから、作者の感情を表す情意性形容詞（シク活用形容詞）が制限されたことが考えられるのに対して、仏典や漢籍などの漢文を直訳した内容であるＤ訓点資料については、和文に比して形容詞が相当少ないことや、表現内容そのものが情意性形容詞（シク活用形容詞）となじまないというような、資料自体にある種の制限が存したことが考えられること、さらに、中古で新たに用いられるようになった口語性の強い要素、たとえば、接頭辞モノやナマや接尾辞～ハシ・～ガマシなどがほとんど用いられない、いやむしろ、これらは避けられており、シク活用形容詞の少なさの一因となっていると考えられる。

次に、Ｇ狂言資料ならびにＨキリシタン資料について見る。

表３－１　狂言　ク活用

分　類	狂言　ク活用		作品名	天正本	虎明本	虎清本	狂言六義	狂言記
	異なり語数	比率(%)						
二単位	93	31.5	語数	32	85	20	74	50
			比率(%)	60.4	37.9	64.5	45.4	54.9
三単位	184	62.4	語数	18	126	10	80	39
			比率(%)	34.0	56.3	32.3	49.1	42.9
四単位	17	5.8	語数	3	13	1	8	2
			比率(%)	5.7	5.8	3.2	4.9	2.2
五単位	1	0.3	語数	0	0	0	1	0
			比率(%)	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0
合　計	295	100.0	語数	53	224	31	163	91

表３－２　狂言　シク活用

分　類	狂言　シク活用		作品名	天正本	虎明本	虎清本	狂言六義	狂言記
	異なり語数	比率(%)						
二単位	69	66.3	語数	14	58	16	43	28
			比率(%)	70.0	67.4	80.0	66.2	71.8
三単位	33	31.7	語数	6	26	4	20	11
			比率(%)	30.0	30.2	20.0	30.8	28.2
四単位	2	1.9	語数	0	2	0	2	0
			比率(%)	0.0	2.3	0.0	3.1	0.0
五単位	0	0.0	語数	0	0	0	0	0
			比率(%)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合　計	104	100.0	語数	20	86	20	65	39

表４－１　キリシタン資料　ク活用

分　類	キリシタン　ク活用		作品名	平家	伊曾保	金句	懺悔
	異なり語数	比率(%)					
２単位	73	36.0	語数	59	33	40	17
			比率(%)	42.1	43.4	60.6	73.9
３単位	116	57.1	語数	68	40	26	6
			比率(%)	48.6	52.6	39.4	26.1
４単位	14	6.9	語数	13	3	0	0
			比率(%)	9.3	3.9	0.0	0.0
５単位	0	0.0	語数	0	0	0	0
			比率(%)	0.0	0.0	0.0	0.0
合　計	203	100.0	語数	140	76	66	23

表４－２　キリシタン資料　シク活用

分　類	キリシタン　シク活用		作品名	平家	伊曾保	金句	懺悔
	異なり語数	比率(%)					
２単位	64	68.1	語数	55	23	21	7
			比率(%)	70.5	76.7	75.0	58.3
３単位	30	31.9	語数	23	7	7	5
			比率(%)	29.5	23.3	25.0	41.7
４単位	0	0.0	語数	0	0	0	0
			比率(%)	0.0	0.0	0.0	0.0
５単位	0	0.0	語数	0	0	0	0
			比率(%)	0.0	0.0	0.0	0.0
合　計	94	100.0	語数	78	30	28	12

表３－１（ク活用形容詞)･表３－２（シク活用形容詞）はＧ狂言資料、表４－１（ク活用形容詞)･表４－２（シク活用形容詞）はＨキリシタン資料から採取された形容詞における構成単位数別の異なり語数とその構成比率を示したものである。

これらの表から、両資料とも、主流になっているのはク活用形容詞では三単位語（Ｇ62.4%・Ｈ57.1)、シク活用形容詞では二単位語（Ｇ66.3%・Ｈ68.1%）で、また、それぞれに次ぐ形容詞もク活用形容詞が二単位語（Ｇ31.5%･Ｈ36.0%)、シク活用形容詞が三単位語（Ｇ31.7%・Ｈ31.9%）と同様の様相を呈し、その構成比率も近似している。

以上のことから、Ｂ散文作品・Ｅ今昔物語集・Ｆ軍記物語・Ｇ狂言資料・Ｈキリシタン資料の資料では、ク活用形容詞は三単位語を中心とするなか、Ｅ今昔物語集･Ｆ軍記物語･Ｇ狂言資料・Ｈキリシタン資料では二単位語が次ぐという様相を呈している一方、Ｂ散文作品では四単位語以上の形容詞がこれに次いでおり、長単位語化が進んでいる様相はＢ散文作品のみに見られる様相であって、時代が下ったＧ狂言資料・Ｈキリシタン資料でも三単位語に次ぐのは二単位語であることが明らかになり、中世以降の資料の調査結果から、他の資料とは異なるＢ散文作品の特質が顕在化した。

四

さらに、階層構造という観点から異なり語数とその比率を見る。

階層構造（副次結合度）とは、拙著で詳しく述べたように、成立した語形が形容詞として第一番目のものであるか、あるいは既存の形容詞に何らかの語構成要素が接合して構成された第二番目（この第二番目の形容詞にさらに別の要素が接合して構成された第三番目）のものであるかを分析したもので、派生や複合によってどの程度自己増殖が進んでいるかを捉えようとした観点である。

たとえば、形容詞として成立した第一番目の語形である第一次形容詞として「なし・くるし」等があり、この第一次形容詞から構成された「をさ／なし・こころ／ぐるし」等は第二次形容詞ということになる。さらに、この第二次形容詞から構成された「こころ／をさ／なし・もの／こころ／ぐるし」等は第三次形容詞となる。

まず、A上代資料および中古以降の資料（B～H）から採取された形容詞の階層構造別の異なり語数とその比率は以下のとおりである。

※ク活用形容詞

		第一次	第二次	第三次
A	上代形容詞	93語	41語	0語（69.4％ — 30.6％ — 0％）
B	散文作品の形容詞	114語	585語	39語（15.4％ — 79.3％ — 5.3％）
C	八代集の形容詞	72語	135語	3語（34.3％ — 64.3％ — 1.4％）
D	訓点資料の形容詞	60語	92語	0語（39.5％ — 60.5％ — 0％）
E	今昔物語集の形容詞	86語	247語	14語（24.8％ — 71.2％ — 4.0％）
F	軍記物語の形容詞	80語	131語	2語（37.6％ — 61.5％ — 0.9％）

※シク活用形容詞

		第一次	第二次	第三次
A	上代形容詞	95語	19語	0語（83.3％ — 16.7％ — 0％）
B	散文作品の形容詞	277語	105語	4語（71.8％ — 27.2％ — 1.0％）
C	八代集の形容詞	54語	7語	0語（88.5％ — 11.5％ — 0％）
D	訓点資料の形容詞	43語	1語	0語（97.7％ — 2.3％ — 0％）
E	今昔物語集の形容詞	86語	19語	0語（83.5％ — 16.5％ — 0％）
F	軍記物語の形容詞	81語	13語	1語（86.2％ — 13.8％ — 1.1％）

第一次・第二次・第三次形容詞の量的構成を分析すると、上代形容詞ではク活用・シク活用ともに第一次形容詞が主流であるのに対して、中古資料（B～F）のク活用形容詞では、第一次・第二次・第三次形容詞の量的構成に変化が起こり、第二次形容詞の種類（異なり語数）が一気に増加して第二次形容詞が主流となる。一方、中古資料（B～F）のシク活用形容詞については、上代形容詞とほぼ同じ状況が継続し、とりわけD訓点資料では

そのほとんどが第一次形容詞であり、階層構造という観点から、活用形式において明らかに量的構成が異なっている様相が認められる。

換言すると、中古資料（Ｂ～Ｆ）の形容詞については、第二次形容詞使用の勢いはク活用形容詞において著しく、シク活用形容詞の方は、Ｂ散文作品を除いて、依然として第一次形容詞を主として用いる状況が続いている。

次に、Ｇ狂言資料ならびにＨキリシタン資料について見る。

表５－１　狂言　ク活用

分　類	狂言　ク活用		作品名	天正本	虎明本	虎清本	狂言六義	狂言記
	異なり語数	比率(%)						
第一次	102	34.6	語数	34	91	21	80	53
			比率(%)	64.2	40.6	67.7	49.1	58.2
第二次	187	63.4	語数	19	129	10	80	38
			比率(%)	35.8	57.6	32.3	49.1	41.8
第三次	6	2.0	語数	0	4	0	3	0
			比率(%)	0.0	1.8	0.0	1.8	0.0
合　計	295	100.0	語数	53	224	31	163	91

表５－２　狂言　シク活用

分　類	狂言　シク活用		作品名	天正本	虎明本	虎清本	狂言六義	狂言記
	異なり語数	比率(%)						
第一次	88	84.6	語数	15	75	19	56	33
			比率(%)	75.0	87.2	95.0	86.2	84.6
第二次	16	15.4	語数	5	11	1	9	6
			比率(%)	25.0	12.8	5.0	13.8	15.4
第三次	0	0.0	語数	0	0	0	0	0
			比率(%)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合　計	104	100.0	語数	20	86	20	65	39

表６－１　キリシタン資料　ク活用

分　類	キリシタン　ク活用		作品名	平家	伊曾保	金句	懺悔
	異なり語数	比率(%)					
第一次	79	38.9	語数	65	36	41	17
			比率(%)	46.4	47.4	61.2	73.9
第二次	123	60.6	語数	74	40	26	6
			比率(%)	52.9	52.6	38.8	26.1
第三次	1	0.5	語数	1	0	0	0
			比率(%)	0.7	0.0	0.0	0.0
合　計	203	100.0	語数	140	76	67	23

表６－２　キリシタン資料　シク活用

分　類	キリシタン　シク活用		作品名	平家	伊曾保	金句	懺悔
	異なり語数	比率(%)					
第一次	80	85.1	語数	67	27	26	8
			比率(%)	85.9	90.0	92.9	66.7
第二次	14	14.9	語数	11	3	2	4
			比率(%)	14.1	10.0	7.1	33.3
第三次	0	0.0	語数	0	0	0	0
			比率(%)	0.0	0.0	0.0	0.0
合　計	94	100.0	語数	78	30	28	12

表５－１（ク活用形容詞)･表５－２（シク活用形容詞）はＧ狂言資料、表６－１（ク活用形容詞)･表６－２（シク活用形容詞）はＨキリシタン資料から採取された形容詞における階層構造別の異なり語数とその構成比率を示したものである。

これらの表から、両資料とも、主流になっているのはク活用形容詞では第二次形容詞（Ｇ63.4%・Ｈ60.6%)、シク活用形容詞では第二次形容詞（Ｇ84.6%・Ｈ85.1%）であり、中古資料（Ｂ～Ｆ）の形容詞と同様の様相を呈している。

階層構造の副次化の問題は、構成単位数と連関するものであるが、階層構造についても形容詞の高次元化はＢ散文作品がやや進んでいると見てよい。しかし、注意したいことは、平安時代を経て、鎌倉時代、室町時代と時代が下るにつれ、長単位語化、高次元化がＢ散文作品以降の散文資料においてさらに進展するということではないという点である。

繰り返しになるが、形容詞語彙は、中古に入ると、ク活用形容詞とシク活用形容詞との構成比率に変化が生じる。そして、ク活用形容詞では一語あたりの単位数の主流が二単位から三単位へと移行する一方、シク活用形容詞では依然として二単位語が主流の状況が継続していた。そして、このような変化は、ク活用形容詞において、主流となる語が第一次形容詞から第二次形容詞へ移行していることと連関して、派生や複合といった構成の語の増産、すなわち、新造語における高次元化が起こっているということがその背景にあるということである。ところが、シク活用形容詞の方は、二単位語を主流として第一次形容詞が主流のままであって、ク活用形容詞に認められた派生や複合といった構成の語の生産、すなわち、新造語における高次元化は起こっていないのであり、ク活用形容詞とシク活用形容詞という活用形式の違いは、中古以降、質・量の差として二分化をもたらしたが、今回取り上げた後世のＧ狂言資料･Ｈキリシタン資料においても、その構成比率は横ばいで、長単語化・高次元化が時代とともに一層進展していくというものではないことをおさえておく必要がある。

おわりに

今回の考察の目的は、狂言およびキリシタン資料の形容詞の異なり語数から見えてくる「体系」を見出すことであったが、既に分析済みの上代～軍記物語の様相と比較するこ

とで、中古散文で起こった変化、すなわち長単位語化・高次元化の傾向が引き継がれているのではなく、中古散文を除く他の作品と同様一定のラインに落ち着いていることがわかり、むしろ、中古散文の特異性があらためて浮き彫りになったと言える。

今回の異なり語数における三つの観点からの分析だけでは狂言・キリシタン資料の形容詞の特徴が十分に明らかになったとは言えないため、次回は、延べ語数から見た「運用のあり方」や新出語、特に新たな造語形式を持つ語についての考察を試みたい。

【付記】

本稿は、日本学術振興会平成25－27年度科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号25370533）による研究成果の一部である。

注

注１　『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』（[2005·11] 和泉書院）

注２　「今昔物語集の形容動詞対照語彙表」『大阪国際大学紀要国際研究論叢』18-2［2005·1］
「今昔物語集の形容詞対照語彙表―天竺・震旦部―」『大阪国際大学紀要国際研究論叢』22-3［2009·3］
「今昔物語集の形容詞対照語彙表―本朝仏法部―」『大阪国際大学紀要国際研究論叢』23-1［2009·10］
「今昔物語集の形容詞対照語彙表―本朝世俗部―」『大阪国際大学紀要国際研究論叢』23-2［2010·1］
「軍記物語の形容動詞対照語彙表」『帝塚山学院大学日本文学研究』38［2007·2］
「軍記物語の形容詞対照語彙表」『大阪国際大学紀要国際研究論叢』21-3［2008·3］

注３　『大阪国際大学紀要国際研究論叢』27-2［2014·1］

注４　『大阪国際大学紀要国際研究論叢』27-3［2014·3］

注５　『大阪国際大学紀要国際研究論叢』28-1［2014·10］

注６　阪倉篤義氏「歌ことばの一面」（『文学・語学』105［1985·5］）